

悪霊 第七部・テロルの夢

悪
霊

第
七
部
・
テ
ロ
ル
の
夢

【登場人物】

伊集院満枝……………北海道日市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……………党での名前は井上。戦鬪的技術団に所属する
海老沼千恵子……………家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤児院建設に奔走する。
佳代……………貧しい農家の娘。佐和子のハウスキーパー
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に。
植木……………与太者あがりの「黨員」
曾根……………黨員
朴正烈……………朝鮮人青年
安藤浄海……………貧民街の僧
手塚……………「党」の戦鬪的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
三沢……………党中央委員。特高警察のスパイ
森本警部……………警視庁特高課長

【時・場所】

昭和七年（一九三二）八月～八年一月。軽井沢、東京

V

昭和七年十月六日、正午。

昼食は、豚肉のカツレツだった。ふかした馬鈴薯ジャガイモが添えられている。

「佐和子さま、ご存じ？」

フォークに刺した肉を口に運びながら、海老沼千恵子が問うた。

「なあに？」

「カツ丼というお料理があるでしょう」

カツ丼は、十年ほど前から耳にするようになった。早稲田の学生が考案したという説もあれば、新宿の蕎麦屋そばやが余ったトンカツを利用して発明したという説もある。食い道楽で知られる大阪で作られたと主張する人もいる。

猪俣佐和子は、以前、党幹部である学者の村野栄太郎むらのえいたろうの家に通っていた頃、出前を取り寄せてご馳走になったことがあった。

「一度だけ食べたけれど、なかなかおいしかったわね」

ほろ苦い思いで振り返る佐和子に、千恵子は弾んだ声で言った。

「父の教え子の学生さんから聞いたのだけれど、大学の運動部の方々は、大切な試合の前にカツ丼を食べるんですって」

「なぜ？」

「おわかりになりませんか？」

悪戯いたずらっぽく微笑む千恵子に、佐和子はしばし考えをめぐらせ、やがて、カツと勝かちをかけてるわけ？ と問うた。

「そうです！」

千恵子は手を叩いた。佐和子は、皿に乗ったカツレツに眼をやり、なるほど、だからカツレツなのね、と頷き、笑顔を見せた。

やがて食事が終わり、ティーセットを運んできた佳代に、佐和子は、出かけるわ、と告げた。はい、と頷く佳代に、今日は千恵子さんも一緒だから、と付け加えた。

佳代は、きよとんと佐和子を見つめ、それから二階の物置部屋に眼をやった。小沼と二人きりにするということなのだろうか。

「それから」

佐和子は、一枚の紙片を差し出した。受け取った佳代が紙片に眼を落とすと、所番地が書いてある。

「私たちが出かけたなら、その家に行って待ってなさい」

ここは引き払う。荷物は、党から人がきて処分してくれることになっているから、あなたはその家で、私たちが帰るのを待っていて。

佳代は再び、物置部屋に眼をやった。小沼健吾はどうするのだろうか？ まさか、連日急所を責め苛さいなまれ、立って歩くこともかなわない人を、そこに連れていけと？

「小沼は……」

佐和子は眼を伏せて言った。

「ここに置いていって。党の人が、荷物と一緒に引き取ってくれるから」

引き取って、どうするのだろうか……。佳代の面差しがますます不安げに引きつるのを見やって、佐和子は立ち上がった。

階段をあがって、物置部屋の鍵を開けた。部屋のなかでは、小沼が床に転がったまま、苦しげな呼吸音を響かせていた。

入ってきた佐和子に、小沼はうつろな眼差しを向けた。

「お別れね」

佐和子は静かに言った。

「あなたにはかつて、お世話になったわ。お礼申し上げます」
頭を下げた佐和子を、小沼は不審げに見つめた。佐和子はさらに続けた。

「二年前、あなたがおっしゃるとおり、不手際がありました。わたくしも、黨員としては未熟だったわ。わたくしの未熟さを棚にあげて、あなたにあの失敗の責任を負わせてしまったのなら、謝ります」

そう言って踵を返して部屋を出ようとして、ふと足を止め、小沼のほうを振り返って佐和子は問うた。

「あなた、今でも関わりがあるの？」

誰と？ そう言いたげな面差しの小沼に、佐和子は言った。

「満枝さまと」

小沼は苦笑した。猪俣佐和子を自分と引き合わせたのは、伊集院満枝だったことを思い出した。小沼は口を開いた。

「最後に会ったのは七月だ。それまでも、ちよくちよく会っていた」

佐和子の眉がつまり上がり、息が乱れた。

「なぜ」

震える唇から押し殺した声で、佐和子は問うた。

「党から離れたあなたに、満枝さまがなぜ？」

「あの人は……」

小沼は言った。

「党を応援していたわけじゃない。俺を助けてくれていたんだ」

強張った面差で見つめる佐和子に、小沼は説明した。かつて伊集院満枝の父親が所有する農地で小作人だったこと。小作争議を起こして追放され、党の活動に加わった頃から、なぜか満枝からは、多額の援助が渡されたこと、資金援助は、小沼が党を離れ国家主義団体に加わってからも続いたこと。

「たぶん、あの人は」

小沼は続けた。

「俺を助けてくれたというわけでもないのかもしれない」

「どういうこと？」

しわがれ声で問う佐和子に、小沼は言った。

「彼女は、あんたのことを、強い女性だと言っていた」

佐和子が息を呑んだ。小沼は続けた。

「あんたも俺も、何かをやらかしてくれる……彼女は、そう考えたんじゃないかな。彼女が見た世界を、現実のものとするために」

「馬鹿なこと、言わないで」

佐和子が忌々しげに言った。

「わたくしが東京に来たのは、雑誌記者として自立して生きていくため。満枝さまは、大切な友達だったけれど、わたくしが党の活動に加わったのは、わたくしの意思でやったことよ」

「たぶん、そうなのだろうな」

小沼は言った。

「だが、彼女は、あんたがこうなることを、見越していたような気もする」

佐和子は、小沼を見つめた。苛立ちが怒りへ、怒りは冷たい憎悪へと変わった。佐和子は呟いた。……今日の事が終わったら、殺してやる。

わたくしの手で。

「佐和子さま」

我に返ると、背後に千恵子が立っていた。

「そろそろ、出かけないと」

午後三時。

煉瓦造りの新橋駅前の大通りに、猪俣佐和子と海老沼千恵子に乗せたフォードが停まっていた。佐和子は、派手な訪問着に、黒地に鮮やかな模様を縫い込んだ花柄の羽織を着て、ブルジョアの令嬢を装っていた。一方の千恵子は、大きなレースの胸飾りのついた白いブラウスに、紺色のジャケットとロングスカート、ブーツ、ボブヘアに釣り鐘帽という洋装だった。

運転席に佐和子、助手席に千恵子が座り、膝にハンドバッグを乗せている。千恵子は、落ち着かない様子で、さかんにハンドバッグに触れていた。中には、ブローニングが入っている。

きちんとした背広にハンチング帽の紳士が二人、駅から出てきてフォードに寄ってきた。手塚と曾根だった。二人は後部座席に乗り込み、車を出すよう言った。

「植木は？」

佐和子が訊ねると、手塚は首を振り、あいづ現れなかった、と吐き出すように言った。実行犯三人は、二時に有楽町にある新聞社の前で待ち合わせし、汽車で隣の新橋駅まで移動してからフォードに乗り込み、大森の実行場所に向かう手はずだったのである。

「やっぱり、与太者はだめだ。いざとなつて、おじけづいたんだ」

「まさか、警察に訴え出たのではないでしょうね」

佐和子は言った。千恵子も頷いて言った。

「あの男ならやりかねないわ」

それで、どうするんです？ 佐和子は訊ねた。計画は中止ですか？

「いや、やる」

手塚は堅い面差しで言った。

「党中央は、遅くとも明日までに一万円が必要だと言っている。いまさら中止にはできない」それから、二人のうちどちらか手伝ってほしい、と言った。奪った金を用意したカバンに手早く詰め込むのに、少なくとも二人は必要だ。その間、銀行員が抵抗したり逃げ出したりしないよう、拳銃を構えた見張りが一人要る。男三人がそれを行い、佐和子と千恵子はフォードで待機している計画だった。

だが、植木が来ないとなると、女性二人のうち誰かが、男二人とともに銀行に踏み込む役を務めなければならぬ。

「わたくしが行きます」

千恵子がい、何か言いかけた佐和子を手で制した。

「佐和子さまは和服。ギャングをやるには不向きよ。わたくしは洋装にブーツだから、素早く動けるわ」

「そうね」

佐和子は頷いた。運転は佐和子のほうが得意だが、射撃の腕前は千恵子のほうが上だ。

「お願いするわ」

「小沼さん」

見上げると、黒いメイド服に白いエプロンの佳代が立っていた。眼差しが合うと同時に、しゃがんで小沼のズボンの前をはだけ、陰部に冷たい手拭いをそっと当てた。

「二人とも、出かけたのか？」

佳代の背後に誰もいないのを確かめ、小沼は問うた。佳代は頷いた。

「そうか……」

しばし思いをめぐらせ、やがて口を開いた。

「すぐに、ここを出なさい」

佳代は、驚いた面差しで小沼を見た。

「たぶん、もうすぐ警察がやってくる」

小沼は説明した。

党が、美人局や恐喝など、世間が眉を顰めるような行為で金を稼いでいるという噂は、小沼の耳にも入っていた。モスクワからの送金が途絶え、汚い手段で金を稼ぐしかなかったのは確かだが、警察が党に潜り込ませたスパイが、窮した党を操ってそうさせている可能性がある、と、警察に知り合いのいる国家主義団体メンバーがそう言っていた。

じっと見つめる佳代に、小沼は続けた。

きれぎれに聞こえてくる佐和子と千恵子の会話から、彼女らが、武器を手に、世間から非難を浴びるような犯罪をやらかしそうだと小沼は気づいていた。警察がそれを知っていて、網を張って待ちかまえている可能性もある。

「この家に、党員がいることも知っているかもしれない」

小沼は言った。

「だとしたら、警察は必ず、踏み込んでくる。特高に捕まれば、拷問される。連中は、女にも容

赦しない。警察が来る前に逃げろ」

佳代は、面差しを難くしたまま無言だった。無言のまま、しばし首を傾げ、やがて口を開いた。

「どこに、逃げるんですか？」

身寄りのない佳代には、行く先などない。誰かが、面倒を見てやらねばならないのだ。

「わかった」

小沼は言った。

「今から、俺と逃げよう。行くあては、ある」

そう言って、立ち上がった。とたんに股間に激痛が走り、脳がぐらくらくと揺れた。やっと壁に手を突き、辛うじて体を支えた。立っているだけでやっとなった。膝の力が抜け、再び倒れそうになった。

そのとき、やわらかく暖かいものが、小沼の身を包んだ。

佳代が駆け寄ってきて、小沼のからだを抱き止めていたのだ。その眼差しはまっすぐ小沼に向けられ、希望の光が浮かんでいた。

「行こう」

小沼は声を振り絞った。

「一緒に」

佳代に支えられ、ゆっくりと階段を下り、玄関に向かった。一步足を踏み出すたびに、股間が激しく痛む。嘔吐がこみあげてくる。足がよろけ、支えてくれている佳代が、小さく呻く。それを何十回も繰り返して、やっとドアにたどり着いた。

「小沼さん」

佳代が、額の汗を拭いながら、言った。

「ドアまで来ました」

開けてくれ……。かすれ声で小沼は言った。言葉を発して激しく咳き込んだ。佳代が、背中をさすってくれていた。

なんとか……。なんとかして、安全な所へ。

佳代の悲鳴が降ってきた。

開いたドアの向こうに、大勢の警官が立っていた。

新橋駅から、京浜国道を経て海岸通りに入り、大森海岸を右折して進むと、やがて大森駅が見えてきた。駅前には、大森銀座と呼ばれる繁華街で、駅と向かい合って天麩羅屋、カフェー、寿司屋、おでんや、時計屋が並んでいる。その一角に、目当ての銀行の建物があった。

フォードは、銀行の玄関前に停まった。午後四時。すでに店は閉まっている。内部では銀行員が総掛かりで、カウンタ―に並べた札束を数えているはずだった。

「交番があるな……」

車窓の外を見ていた曾根が呟いた。数十メートル先に駅に接して交番があり、黒い制服の警官が一人、立っている。

「大丈夫だ」

手塚が言った。銀行の裏口は交番からは死角になっている。出入りは裏口を使うから、見つか

るはずがない。

曾根は、自ら納得させるように何度か頷いた。行こう。手塚の言葉に、二人の男は後部座席から外に出た。助手席の千恵子は、ハンドバッグを握りしめ、佐和子を見た。佐和子は言った。幸運を祈るわ。千恵子は深呼吸した後、佐和子の首にすがりつき、佐和子の唇に自分の唇を重ねた。それから勢いよくドアを開け、外に出た。

狭い大森銀座の通りに、人がひしめいていた。日本橋や丸の内、幅の広い道路では追跡された場合、かえって捕まりやすい。ここならば、人混みにまぎれて追っ手をまくこともできる。運転席から銀行の看板を見つめつつ、佐和子は思った。さすがは三沢さん。用意周到だわ。

手塚と曾根、そして千恵子は裏通りに回った。今頃、裏口から銀行に入っているはず。内部で何が起こっているかは、佐和子からは見えない。大丈夫、いざとなると足を引っ張りそうな植木が逃げたのは、かえって好都合。手塚さんや曾根さんだったら、うまくやるはず。千恵子も最近、めきめき頼もしくなったし……。

そう思っふと駅に隣接する交番に眼をやり、佐和子の総身が強張った。

いつの間にか、交番前には、十人近い警官がいた。銀行の入口をちらちら見やりながら、何か相談している。

植木だ……！

佐和子は叫びそうになった。

植木が警察に駆け込み、白状したんだ！

裏口には鍵がかかっているなかった。静かにドアを開けた手塚に続いて、曾根と千恵子が内部に入ると、廊下が店舗のほうに伸び、左右に小部屋があった。静かに廊下にあがると、小部屋の一つのドアが開いた。ワイシャツに黒い袖カバーをつけ、眼鏡をかけた銀行員が出てきた。背広姿の男二人に、派手な洋装の女。銀行員は咄嗟に笑顔を浮かべ、どちら様でしょうか？と問うた。

千恵子は、曾根が懐に右手を入れ、ブローニングを取り出すのを見た。拳銃を見てもなお、銀行員は笑うのをやめない。何かの冗談ですよ、と言いたげだった。

曾根は、銃口を床に向け、引き金を引いた。銃声に、銀行員の笑みが消えた。店舗のほうで、銀行員たちが一斉にこちらを向く気配がした。

どうしよう……。

運転席に座ってハンドルを握りしめたまま、佐和子は必死に考えをめぐらせた。

十人を超える警官たちは、二手に分かれた。半分は閉まった銀行の入り口に向かって歩き出し、残りは裏口へと向かった。

膝に置いたハンドバッグを見た。なかにブローニングが入っている。これをどう使えば、銀行に入った三人を助けられるのか。

考えがまとまらないまま、総身が震え、脳は沸騰した。

「手を上げろ！」

手塚が叫んだ。同時に、曾根がもう一発、床に銃弾を撃ち込んだ。

店舗のカウンターの内側で、デスクに並べた札束を数えていた銀行員たちは、不意に闖入してきた三人の姿に、恐怖に眼を見開いている。

「みな、立って壁に手をつけ！」

手塚の怒声に、十人ばかりいた銀行員たちはなんの反応もしなかった。支店長席に座っていた男の、言うことを聞きなさい、という悲鳴に似た指示に、一斉に立ち上がって壁に向かって走り、両手を壁に突いた。

手塚が、千恵子に目配せした。千恵子は、ハンドバックからブローニングを取り出した。

「おかしなことをやったら、撃つわよ！」

自然と声が出た。わかりました！ 支店長が甲高い声で言った。なんでも言うとおりにしますから、撃たないでください！

拳銃を構えた千恵子の唇が歪み、笑みの形を取った。いま、銀行にいる男たちは、自分の支配下にあつて、怯えている。そう思うと、ぞくぞくとした喜びがこみ上げてきた。

「もういい」

札束を用意したカバンに詰め込んでいた手塚が、曾根に声をかけた。

「行くぞ」

その瞬間、入口でガラスが割れる音がした。つづいて、複数の靴音。

サーベルをかざした警官たちがなだれ込んできた。

なぜ……？

佐和子は自問自答した。

なぜ私は、ハンドルを握ったまま、何もできないの？

フォードのフロントガラスの向こうで、警官たちが入り口のガラス戸を蹴破って乱入した。周りの通行人たちが足を止め、銀行のなかをのぞき込んでいる。死角になっていて佐和子には見えないが、手塚や曾根、そして千恵子が、乱入した警官たちともみ合っているであろうことは、容易に察せられた。

どうすればいいの……？

佐和子は、泣き出したかった。なぜ自分は何もできないのだろう。ろくでもない男たちを追い詰め、大金を巻き上げてきた自分が、ハンドバッグに拳銃を持ち、フォード車に乗っていないながら、なぜ、何もできないのだろうか。なぜ、どうしていいか分からず、眼から涙がこぼれ落ちているのだろうか。

入り口から、何かが飛び出してきた。警官に両腕を掴まれ、必死に抵抗している海老沼千恵子だった。

千恵子さん！

運転席で思わず、佐和子は叫んでいた。声は届かなかった。千恵子は、警官の股間を蹴り上げた。警官は両手で股間を押さえ、地面に突っ伏した。千恵子はハンドバッグから拳銃を取り出し、銃口を、倒れた警官に向けた。

撃っては、だめ！

佐和子は叫んだ。

早く来て！ 今なら逃げられるわ！

千恵子は眼を見開いていた。面差しから血の気が引いていた。拳銃を持つ手が震えていた。千恵子の口が大きく開いた。何かを絶叫しながら、しかし引き金にかけた指は動かない。

その時、千恵子は背後を振り向いた。もう一人の警官が銀行から飛び出してきた。

銃声が響いた。

千恵子は、飛び出してきたもう一人の警官を撃ったのだ。

警官は、銃弾を受けた膝を押さえて前のめりに倒れそうになり、倒れそうになりながら、千恵子に追いつき、押し倒した。

「やめて！」

自分が撃った銃弾で脚に負傷を追いながら、のしかかってきた警官の背中を、手にした拳銃の銃創で殴りつけながら、千恵子は叫んだ。

「離れて！ 撃つわよ！」

凍りついたように、一部始終を運転席で見ていた佐和子の視界に、自分を組み伏せた警官の背中に、銃口を押し当てる千恵子がうつった。

だめ！

叫ぶ間もなく、千恵子は引き金を引いた。警官と千恵子が、同時に痙攣した。銃弾は、警官の背中から腹部を貫通し、千恵子の腹部をも抉った。千恵子の背中から、血が流れ出し、舗装道路を赤く染めた。

フォードのハンドルに額を押し当て、ぜいぜいと肩で息をしていた佐和子が顔をあげた時、銀行前には、大勢の警官が屯し、通行人の人垣ができていた。その人垣のなから、警官たちに両脇を抑えられた手塚と曾根が現れた。

千恵子の姿はなかった。警官とともに運ばれたようだったが、彼女が倒れていたあたりは血の海だった。

終わった……。

銀行強盗も、その結果起こるはずだった武装蜂起も、何もかも、終わった。

涙が次々と湧き出し、止まらなかった。

こつこつ、と車窓を叩く音がした。

車窓を見て、佐和子は小さく悲鳴をあげた。

一人の警官が、のぞき込んでいた。

どうしました？ というふうには警官の唇が動いた。咄嗟に佐和子は、ドアを開けて顔を出し、にっこりと笑みをつくった。

すみません。とても怖くて……。目の前でこんなことが起こったものですから。

ああ、確かに。まだ二十歳半ばくらいの若い警官は頷いた。運転できますか？

大丈夫です。ご心配をおかけしました。

そう言って頭を下げると、警官は拳手の札をして去っていった。

差し込んだキーを回してエンジンをかけた。かけながら佐和子は、笑いがかみあげてくるのを抑えられなかった。あの警官、わたくしがギャングの仲間だとは考えもしなかったのだわ。たぶん、貧乏人の小せがれね。立派な服を着た人間には、よほどの事がないと逆らっちゃいけないものだと思ひ込んで。さすが三沢さんだわ。そういう権力の犬の気質をわかってらっしゃるのね。エンジンがかかった。佐和子はアクセルを踏んだ。フォードは軽快に走り出した。

どこまで行こうかしら。

鼻歌をうたいながら車を走らせていた佐和子の脳裏に、海老沼千恵子の背中から流れ出した大量の血と、大きく眼を見開いて絶望的な面差しの千恵子の顔が浮かび上がった。一緒に死んでくださいますわね。そう言った時の、千恵子のまっすぐな瞳が蘇った。

なぜなの！

なぜ、私だと、こうなるの！

泣き叫びながら、佐和子は海岸通りを疾走した。

VI

——銀行ギャング、白昼堂々の凶行 警官一名が重傷。

——三人組はいずれも党の枢要人物。

——赤色女強盗は、家出した帝大教授の令嬢。麻布の洋館で贅沢三昧。ハウスキーパーも検挙。「うまくいったじゃないですか」

三沢は、読んでいた新聞をたたみ、差し出した。

新橋の小料理屋。狭い座敷に向かい合って座っているのは、警視庁特高課長の森本警部。四十代にもかかわらず皺の目立つ面差しを苦々しく歪め、新聞を受け取って広げ、吐き捨てるように言った。

「所轄の大森署から苦情が来ている」

「ほう」

「拳銃で武装しておるなどと、聞いていなかった、おかげで怪我人が出た、とな」

当時の警察官は、犯人検挙の際に拳銃を使うことはなかった。相手が拳銃を持っていると知っていれば、防弾チョッキや鉄兜、楯を用意することもできたのだ。

「そんなものを準備すれば、最初から銀行襲撃することを分かって待機していたことが、ばれてしまうじゃないですか。それに……」

三沢は苦笑しながら言った。

「こっちは、死人が出ています」

海老沼千恵子のことだった。

警官に組み敷かれ、背中から相手を撃った。銃弾は経験の背中から腹部を貫通したが、一命を取り留めた。

だが、貫通した銃弾を腹部に受けた千恵子は、病院に運ばれた後、息を引き取った。

「死因は出血多量でしたっけ。なぜか警官は助かって、あの女は死んでしまった……」

「だったら、なんだと言うんだ？」

森本警部は、鋭くにらみつけた。

「拳銃を持った連中の強盗現場に、警官隊を踏み込ませれば、こういう事態は予想できた。それを知っていたのは、貴様だけ。俺も聞いておらん」

「そのとおり」

三沢は、笑みを浮かべた。

「女が死んだのは計算外だったが、警官に怪我人が出たおかげで、世間は党のことを、凶悪な無法者の集まりだと思ったはずですよ。同情も減るでしょう。今後、弾圧もやりやすくなるんじゃないですか？」

ついでに、死んだ女が美人局をやっていた証拠もありますが、こいつも提出しましょうか？ ますます党の印象が悪くなりますぞ。

暗い笑顔を浮かべる三沢に、嫌悪の眼差しを向け、森本は何も答えなかった。三沢は、今度お持ちします、と小さく言った。森本が問うた。

「そんなことより、例の準備は進んでいるのか？」

十月の末、熱海で党の全国大会が開かれることになっていた。東京の中央委員をはじめ、地方支部の指導者ら数十人が出席する。そこに踏み込めば、党幹部を根こそぎ捕まえることも可能だ。

三沢は笑顔で頷いた。大丈夫です。旅館も二日間押さえました。

「拳銃は、五挺持って行くはずですよ」

ちゃんと伝えましたぜ、と付け加えた三沢に、森本は懐から封筒を取り出した。分厚くふくらんだ封筒の中身を改めながら、いよいよやるんですか？ と三沢は問うた。森本は頷いた。全国大会の襲撃を皮切りに、全国で一斉検挙をやるから、その前に金を持って逐電せよとの意である。「ところで……」

三沢は、札束入りの封筒を懐にしまいながら、訊ねた。

「ギヤングたちは、もう白状したんですかい？」

森本は頷いた。

「植木が事前に出頭して全部喋ってくれたおかげで、取り調べは順調だよ」

「なるべく早く早く釈放してやってくださいよ」

三沢は笑っていった。ただの与太者ですから、と言う三沢に、森本は、その約束はできんな、と首を振り、あの男の前歴は知っているだろう、と付け加えた。三沢は、与太者だった頃の植木の前科を思い浮かべた。恐喝、誘拐、婦女暴行……。殺人の容疑もかけられている。

森本はさらに短く言った。

「口の軽い男は信用できん」

確かに植木なら、警察に協力してアカの検挙で大手柄を立てたと吹聴しかねない。なるほど、あんたら警察お得意の、いつの間にか獄中死って奴ですか。そう口には出さず薄ら笑いを浮かべた三沢に、森本は話題を変えた

「あのハウスキーパーが意外と頑固だな」

「ああ、佳代という女ですね」

「おとなしそうな小娘のくせに、一言も喋ろうともしない。悲鳴もあげない、ちよつと締め上げれば転向する男の黨員より骨があると、刑事たちも感心しておった」

「あんたらの尋問に耐えられるんですから、そりゃあ、なかなかの偉物ですな」

じろりと睨みつけた森本の眼差しを避けるように眼を逸らし、そういえば、と三沢は問うた。

「井上は、捕まえないんですか？」

フォードを運転して実行犯を運んだ猪俣、佐和子のことは、新聞に名前すら出ていなかった。森本は答えなかった。

「ふうん、今回も一網打尽というつもりでもないのですね」

三沢は呟くように言った。

「取り締まる相手を少しでも残しておいて、予算と人員は確保しておくのが、お役人のやり口ですからね」

不機嫌そうに杯を飲み干す森本警部に、三沢はさらに言った。

「不逞の輩がいなくなったら、作り上げればいい。そのために法を拡大解釈し、罪をでっちあげる。そんなことならないように、お願いしますよ」

森本警部の面差しに怒気が走った。徳利を掴み、なかの酒を三沢の顔にぶちまけた。三沢は慌てることなく、ハンカチを取り出して顔をぬぐい、一礼して座敷を出た。

その月の末の十月三十日、党全国大会が開かれていた熱海の旅館を、警察官百名が襲撃、集まっていた中央委員ならびに地方指導者は逮捕された。翌日には東京都内のあらゆる「隠れ家」に

警察が踏み込んだ。ごく少数の幹部をのぞいて、党は壊滅状態となったが、逮捕者のなかに中央委員の三沢はいなかった。

それらの検挙は、新聞記事にはならなかった。党が起こした事件は大々的に報じるが、警察の弾圧は秘匿する。世間に、左翼勢力の禍々しさだけを印象づけることを狙った措置だ。

そのころ、貧民窟の荒れ寺に小沼健吾が姿を現した。今までどこで何してたんだよ、という金沢文子に小沼は何も答えず、小柄な彼女の体にすがって泣いた。

銀行襲撃事件の朝、小沼は踏み込んだ警官隊によって、佳代とともに拘束された。すぐに釈放され、入院したのは、所属する国家主義団体が警察に掛け合ってくれたからだろう。辜丸の傷も癒えて退院した小沼は、警察に赴いて佳代の安否を訊ねようとしたが、門前払いだった。国家主義団体の同志を訪ねる気にはなれず、荒れ寺で文子にしがみつこうように過ごした。

やがて、年が開けて昭和八年となった。

一月半ばの日曜日。松も取れ、東京市内はそれなりの活況を見せている。前年五月、犬養総理が暗殺され齋藤実内閣が発足し、金融界の長老高橋是清が大蔵大臣に就任した。満州事変の軍需景気もあり、経済はそれなりに上向いていた。

上野駅前の通りは、着飾った人々でごった返していた。その人混みのなかに、ボブヘアに黒い釣り鐘帽をかぶり、黒いコートの裾から伸びる白いタイツに覆われた丈夫そうな脚を動かし、ポケットに手を突っ込んで俯き加減に歩く、肩幅の広い大柄な女がいた。ふっくらした頬に赤い唇。

繁華街を過ぎ、湯島神社の境内下の通りを抜け、住宅街に向かう。路地の突き当たりにある崖下の粗末な平屋の前に止まり、格子戸を叩いた。

「飯島です」

格子戸が開き、飯島と名乗った女は、無言でなかに入った。靴を脱いで玄関をあがり、廊下を歩いて、奥の部屋の前に立ち、襖を開けた。

家の窓という窓はカーテンに覆われ、暗闇のなかで裸電球一つがぼんやりと光っていた。畳の中央に、一人の男がこの寒さにランニングシャツ姿で、俯いて座っていた。両手を後ろ手に縛られている。その周りを、血走った眼の男たちが四人、囲んでいた。

「白状した？」

女が問うた。それが、なかなか頑固で……。一人の男が吐き捨てるように言う。女は、縛られた男を、何かを確かめるような眼つきで見た。男の頬は腫れ上がり、肩のあたりにも殴られた痕跡がある。

「猿ぐつわを」

女が冷やかかな口調で言った。縛られた男が何か言おうとしたが、たちまち口のなかに丸めた雑巾をつっこまれ、猿ぐつわを噛まされた。

「仰向けにして、暴れないように押さえていてね」

言いながら、女はコートを脱いだ。赤いニットのセーターを、豊かな乳房が大きく押し上げていた。

女は、押さえつけられた男の脚と脚の間に立ち、ゆっくりと右足を上げた。その踵が狙っていた。

る個所を察知したのか、男は恐怖に目を見開き、塞がれた喉の奥で懇願するような悲鳴を迸らせた。女はゆっくりと足をおろし、男の股間を踵で踏みつけた。

男は激しく暴れたが、四人がかりで押さえつけられ、抵抗できなかつた。女は眉ひとつ動かさず、男の陰囊に体重をかけた。男の両眼から滝のように涙が噴き出した。

「喋らないと、潰れるよ。いいの？」

激痛に悶える男を見下ろしながら、女の唇に薄ら笑いが浮かんでいた。股間から足を離し、すかさず睾丸を爪先で蹴った。男は大きく海老反りになった。

「白状する気になったか、聞いてみて」

女に言われ、一人の男が猿ぐつわを緩めた。悶絶する男は必死で唇を動かした。その唇に耳を寄せていた男が「白状するそうです」と言った。そう。女は頷き、畳に腰をおろし、あぐらをかいて座った。煙草を取り出して火をつけ、大きく煙を吐き出し、笑顔で言った。

「モスクワ式は手っ取り早いでしょ？」

一人の男が女に向かって、ありがとうございました、と頭を下げ、さすがですね、と追従笑いを浮かべた。

「あたいがやるから、いいんだよ」

洋装に似合わぬ江戸前の巻き舌だった。

実は、党中央から連絡員が来まして、と男が言い、紙片を渡した。所番地が書いてある。

「ふうん、年が開けたら、鶴沼で中央委員会かア」

女は、けらけらと笑った。

「あたいみたいな女工あがりやが中央委員なんて、党も結構やばいんじゃないの？」

部屋にいた男たちが一斉に女を見た。あれ、これ禁句なの？ 女はそう言っただけおもしろい、あとはよろしくね、と言い残して家を出た。

女——モスクワから帰国した元女工の貴代美の姿は、再び上野の繁華街へと向かい、雑踏に消えた。
(第七部・了)